

雑誌『手工研究』について

1982年10月11日

日本産業教育学会第23回大会

佐々木 享
(名古屋大学)

はじめに

雑誌『手工研究』(1941年4月号より『工作研究』と改題)は、手工教育に関する研究とその成果の普及をめざした雑誌であり、手工研究会の機関誌であった。1907(明治40)年から1943(昭和18)年まで刊行されたこの雑誌は、手工教育史研究、工作教育史研究の最も重要な資料の一つである。しかし、今日のところ、273冊全部^{*}を揃えている図書館、研究機関は知られていない。たとえば、添付した資料に示したように、国立国会図書館には約30冊、名古屋大学教育学部には159冊所蔵されているのみである。

私は最近、富田馨吾氏の好意でほぼ全冊^{*}を調査する機会を得たので、とりあえず、この雑誌の発行状況等の概略を報告する。

*各輯または号の発行日、本文ページ数等は資料に掲げた。

発行年月日の記載のないもの(18冊)は、報告者がみた雑誌では奥付のあるべきページが欠損していることを示す。

また、富田氏によれば、1942年7月と8月とは発行されず、また、'43年8月を最後に発行されなくなったとされるが、雑誌等に休刊、停刊に関する記述があるわけではないので、これらについては、なお調査する余地が残されている。

7. 手工研究会の創設と『手工研究』の創刊

手工研究会の創設、『手工研究』発刊の事情は、第1輯の「本会沿革及び行事」、第2輯の「手工研究大会記事」、森利平「手工研究に関する今昔談」などに詳しい。^{*} これらによると、研究会の創

立、雑誌発刊の事情は以下のとおりである。

1889(明治22)年8月1日より25日まで東京府主催の手工講習会が開かれ(参加者83名)、その修了者の懇親会が同年9月20日にもたれた折、その出席者(68名)の発意で、講習会の講師上原文四郎**を中心に手工研究会を発足させる相談がまとまり、同年10月17日に会則を整え、手工研究会の発会式を開いている。以来毎月1、2回の研究会を重ねてきたが、1897年には休会状況になったという。

* 森利平については、No.89を参照。

** 上原文四郎(1848~1913)は、1883(明治16)年より東京職業学校に勤務し、1887(明治20)年、'88年に文部省が開いた手工教育講習会の講師の1人となり、手工教授法を担当し、彼は、1891(明治24)年には、東京音楽学校教授兼東京美術学校教授となっている。この頃の手工研究会は、上原の自発で行われたという(内海静「手工科建設者岡山教授の追想」No.157 p.56)。

その後、1906(明治39)年9月30日、1899(明治32)年から、高等師範学校の手工科担任教授となっていた上原文四郎ら有志により、「手工教育の普及改良を図る」目的で手工研究会が再興された。翌10月17日に創立総会が開かれ、会則が決められたので、この日をもって手工研究会の創立記念日(または「第2の誕生日」としている場合が多い。(稀に、9月30日をもって第2の誕生日としている者もある。))翌1907年3月31日の第18回会合*で雑誌発行を決め、編集委員一戸清方を中心に準備をすすめ、1907年7月に第1輯発行の運びとなった。

* 会合の回数には、9月30日の会合を起算として数えているらしい(No.1 p.177~178参照)。「手工研究」によると、通しナンバーのついた会合は、少くとも1913(大正12)年1月22日の第170回例会まで記録されている。(No.51参照)。

当初の誌面は概ね、研究、雑報、雑録、会報等で構成されているが、第1輯から第6輯(1910年2月発行)までは、冒頭に研究会例会の討論内容が逐記形式で載っている。

2. 『手工研究』 『工作研究』 の刊行状況

『手工研究』 の刊行状況

『手工研究』は1907(明治40)年7月に創刊され、明治、大正年間には概ね1年に数冊発行された。1915年から1917年までの3年間は最も多く、年間6冊発行された。

1925年2月21日の手工研究会総会で月刊化が決められ(No. 60 p. 39~40)、第60輯(1925年4月発行)から月刊雑誌となった。ただし月刊化されたと言っても、1925年11月、'26年2月、'28年9月には諸種の事情で発行されなかった。通巻ナンバーは第60(1925年4月発行)までは「輯」、第61('25年5月発行)から「号」と称した。

『工作研究』 の刊行状況

『手工研究』は第249号(1941年4月発行)から『工作研究』と改題した。これは、同月から施行された国民学校令により国民学校に「工作」が設けられたことに対応した措置である。263号('42年6月発行)までは順調に毎月発行されたが、'42年7月、8月、'43年3月、'43年6月には発行されず、第37巻第6号(休刊扱いし停刊のことにはない)(通巻第273号、1943年8月発行)を最後に休刊した。

雑誌の編集、発行体制

『手工研究』の発行所は、宝文館(No. 1~4)、文美堂(No. 5~17)、手工研究会事務局所(No. 18~59)、囲画手工社(No. 60~98)としばしば変り、発売元もよく変わった(表参照)。

『手工研究』 の発行所と発売所

	発行所	発売
1('07.8)~4()	宝文館(大柴久吉)	宝文館
5('09.10)~17('14.3)	文美堂(村上孫三郎)	文美堂
18('14.5)~44('19.5)	手工研究会	大日本図書ほか
45('19.8)~59()	手工研究会	手工研究会
60('25.4)~98('28.8)	囲画手工社(佐竹林蔵)	囲画手工社
99('28.10)~136('31.11)	(財)手工研究会	囲画手工社
137('31.12)~	(財)日本手工研究会	(財)日本手工研究会

99号からは、手工研究会自営となった。

しかし、重要なことは、この雑誌が、最初から最後までつねに手工研究会(のち工作研究会)の手で編集されたことである。つねに専任の編集者がなく、社団法人になり、発行部数が多くなったごく一時期に僅かな手当が支給されたのが唯一の例外で、最終文字通り手工研究会役員の手当で編集されたものであることは特筆する必要がある。

そのためミスが多いなどの欠陥は避けがたかったようである。(編集の実態については、たとえばNo.105の伊藤論文参照。)

発行部数

発行部数についての系統的な資料や記事はない。No.33(1917年2月発行)の記事によると、当時は概ね毎月500部は印刷されていたという。当時の会員は350名前後で、採算がとれず、100~200冊の欠損があったという記録がある。

1934年から1938年では、総会で製本部数が発表されている。

総会の年月	製本部数	当時の会員数
1934.5	1380	1280
1935.5	1600	1424
1936.5	1700	1493
1937.5	1800	1586
1938.5	1800	1625

3. 誌面

誌面の内容についての研究は、今後に譲る。

主要な記事・論文は、少なくとも初期は、常に投稿を待つ旨の記事の多いことからみて、投稿を中心に編集していたように思われる。特集を組んだのは次の号のみで、特集形式は例外であったようである。

号	発行年月	内容
15	1913年8月	特集としていないがほぼ全誌面が上原大田郎表 悼記念の記事である。
42	1918. 7	上原先生銅像建設記念号
67	1925. 12	岡山先生還暦祝賀記念号
104	1929. 3	工業科研究号
157	1933. 8	岡山先生追悼号
164	1934. 3	作業科講習会特輯号
186	1936. 1	手工教育五十周年記念大会号
250	1941. 5	阿部先生追悼号

なお、第159号(1933年10月発行)から、表紙の「手工研究」のタイトルの下に、「手工科 工業科 作業科」と小字で書かれていることが注目される。この雑誌が手工科のみでなく、工業科、作業科の問題をもとりあげていることを示唆するためと思われる*。ただし、第219号(1938年10月発行)からこの文字が再び消えた理由は明らかでない。

* ただし、社団法人日本手工研究会定款のうちの「本会ハ、本邦手工教育ノ改善進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」を「本会ハ本邦手工・工業・作業教育ノ改善進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」と変更したのは、1936年12月の臨時総会においてであった。(No. 196, No. 198参照)

『工作研究』と改題する前後から工作教育に関する記事や論文が多くなる。

4. 手工研究会の組織

手工研究会の組織、活動については、かなりの程度を誌面で知ることができる。

当初の手工研究は任意団体であったが、1925年に公益法人化の準備をすすめ、同年12月16日をもって社団法人手工研究会の設立が認可され、26年5月8日に第1回総会を開いた(第71号参照。この号に定款あり)。当時の会員500名弱。29年7月には名称を社団法人日本手工研究会と改称(第109号による)。さらに1936年に目的を変更

したことは前述のとおりである。また、1941年5月には社団法人日本工作研究会と改称したが(第251号による)、この改正された定款の全文は雑誌には報告されなかった。

会長は初代が上原大四郎(1913年3月30日の逝去まで)、2代が関山秀吉(1933年5月14日の逝去まで)、3代が阿部七五三吉(1941年1月23日の逝去まで)、4代が板倉賢治*であった。

* 板倉会長の時代に雑誌が発行されなくなったので、板倉会長の終期、板倉会長以後の役員等については、今後の調査にまたなくてはならない。

会員数

手工研究会の会員数の変遷はつぎのとおりである。
(この数は、調査時期が異なるので、会員名簿の数とは一致しない)

手工研究会の会員数

年月	人数	典拠
1907年5月現在	61	No. 1 p.180~182中名簿による。
10. 11 末	347	No. 10 p. 82
11. 11. 9.	317	No. 12 p. 69
14. 5.	340	No. 19 p. 4
16. 12. 16.	376	No. 33 p. 60
19. 4. 末	384	No. 44 p. 52-53
23. 12. 15.	452	No. 58 p. 49
24. 8.	495	No. " p. "
26. 5. 8.	490	No. 71 p. 37
27. 5. 28.	572	No. 84 p. 30
28. 5. 19.	640	No. 96 p. 33
29. 5. 25.	737	No. 108 p. 41
30. 5. 10.	870	No. 119 p. 45
31. 5. 9	969	No. 131 p. 46
33. 5. 27	1112	No. 156 p. 41
34. 5. 12	1280	No. 167 p. 44
35. 5. 5.	1424	No. 180 p. 43
36. 5. 23.	1493	No. 192 p. 63
37. 5.	1586	No. 203 p. 53
38. 5.	1625	No. 215 p. 49

『手工研究』には、1, 18, 28, 53, 56, 59, 68, 78, 90, 101, 173,

